

戦前の東北地方における都市システム

Urban Systems in the Tohoku District during the Prewar Period

後 藤 雄 二*

Yuji GOTO*

論文要旨

日本の都市システムは戦後の高度成長期に完成されたとされるが、その特性を理解するためには歴史的要因についても分析する必要がある。都市システムには国家的・地域的・日常的という地域スケールを異にする階層性が存在する。本稿では戦前の東北地方について、地域的・日常的都市システムを分析することを目的とする。

戦前の東北地方では、国家的都市システムに組み入れられた仙台、および、県庁都市、工業都市の成長がみられるが、昭和55年の境域についてみると港湾都市と小規模都市の成長が顕著で、これらにより都市規模の差異が縮小し、戦前に都市システム形成の萌芽がみられたことを示す。また、日常的都市システムについてみると、農村地域の中心都市での中心性が高く、地域的要因が強く作用しているといえる。

キーワード：都市システム、都市の順位規模、都市機能、昼夜間人口比

I はじめに

都市システムとは都市を要素とし、互いに関係をもつ要素の集合と定義される(田辺,1982)。相互作用としては人や物資の都市間流動があげられる。この都市間の相互作用の強弱は、ひとつの国家についてみても時代と地域により差異が生ずることから、それらの都市システム研究の意義が認められよう。日本においては近世の都市システム、近代の都市システム、現代の都市システムと分類され、時代と共に次第に強化されてきたと考えられる。一方、Bourne(1975)によれば、都市システムには、国家的都市システム、地域的都市システム、日常的都市システムという地域スケールを異にする階層性が存在する。これらの中で、地域的都市システムについては、大都市圏と非大都市圏など地域の特性による差異がみられるはずである。

森川(1985)は昭和55年国勢調査報告の人口移動資料をもとにして日本の都市システムを分析し、わが国の都市システムでは都市の階層構造が顕著であることを示し、この中で地域的都市システムとしての東北地方の特性についても説明している。この研究から現代の東北地方は地域的都市システムの面から、ひとつのまとまった地域として把握

することができるといえる。

後藤(2000)は青森県を例として、昭和初期における青森県の都市システムについて分析し、戦後の都市成長の萌芽がすでにみられること、現在と類似した地域特性も認められることを示した。そこで本稿では、現在、ひとつのまとまった都市システムを形成している東北地方について、その戦前の状況について検討することを目的とする。

対象期間は1920年から1940年とし、資料としては国勢調査報告を利用することにする。第II章では都市の順位規模の変化と都市機能の関係について述べ、第III章では現代の視点ということから昭和55年の境域について人口動向を検討し、第IV章では日常的都市システムの視点から昼夜間人口比を指標として分析する。

II 都市の順位規模と都市機能

1. 都市の順位規模

戦前の東北地方における地域的都市システムを概観するため、1920年と1940年の順位規模について説明する。ここでは各年次について10位までについて検討する。

1920年では首位が仙台(13.5万人)で、以下、青

*弘前大学教育学部社会科教育教室

Department of Social Studies, Faculty of Education, Hirosaki University

森(5.5万人)、山形(4.8万人)、盛岡(4.5万人)、米沢(4.3万人)、秋田(4.1万人)、八戸(4.0万人)、若松(3.8万人)、弘前(3.6万人)、福島(3.6万人)となっている。また、1940年には首位が仙台(22.4万人)で、以下、青森(9.9万人)、盛岡(7.9万人)、八戸(7.3万人)、山形(6.9万人)、秋田(6.2万人)、郡山(5.7万人)、弘前(5.1万人)、米沢(4.9万人)、福島(4.8万人)となっている。

10位までについてみると、各県の県庁都市はすべて含まれている。しかし、県庁都市とはならなかった若松は、1920年で県庁都市の福島より順位が上位である。また、米沢、若松、弘前という県庁都市ではない旧城下町も10位の中に含まれている。八戸は小城下町であるとともに工業都市、港湾都市の機能をもあわせもっていた。

1920年から1940年の間の順位変動についてみると、仙台が首位であるのは変化がないが、それ以下の順位では変化がみられる。その中でも八戸は7位から4位への上昇である。新たに10位内に順位を上げたのは郡山(1920年で11位、3.1万人)であり、反対に11位となったのは若松である。10位以下で上昇が目につくのは釜石であり、15位(2.1万人)から12位(4.2万人)へと順位を上げた。

以上のように、県庁都市は順調に人口を増加させ、県庁都市とはならなかった旧城下町では、弘前を除いて順位を下げている。一方、工業都市が

順位を上げていることが理解できる。

図1に1920年と1940年について第1位から第30位までの順位規模を示した。また、図2には1940年における30位までの人口規模をもつ市町村の分布を示した。これには当時の「村」も含まれている。1920年では17位の内郷村、19位の好間村(ともに現いわき市)、1940年では17位の内郷村、30位の好間村である。図1を見ると1920年では首位の仙台と2位との間に規模の大きな差異がある。また、2位の青森から10位の福島までの間は順位規模の法則に従っているのに対して、11位以下もほぼ直線で順位規模の法則に従っている。これに対して、1940年でも首位の仙台と2位の間は規模の格差が大きいのに対して、2位の青森以下では19位まではほぼ直線で、順位規模法則に従っているといえる。しかし、19位と20位の間には規模の差異が顕著である。

以上のように、この時期にはすでに仙台が東北地方の中で中心性の高い階層に属し、国家的都市システムの中に組み入れられ、高次の機能が集積していたことを想像させる。また、1920年には県庁都市と旧城下町とが都市システムの上位階層を構成し、11位以下との間に階層的な差異を生じていた。しかし、1940年には首位の仙台を除くと、2位の青森以下が順位規模に従うように、中位階層の都市が成長してきたことを示しているのである。

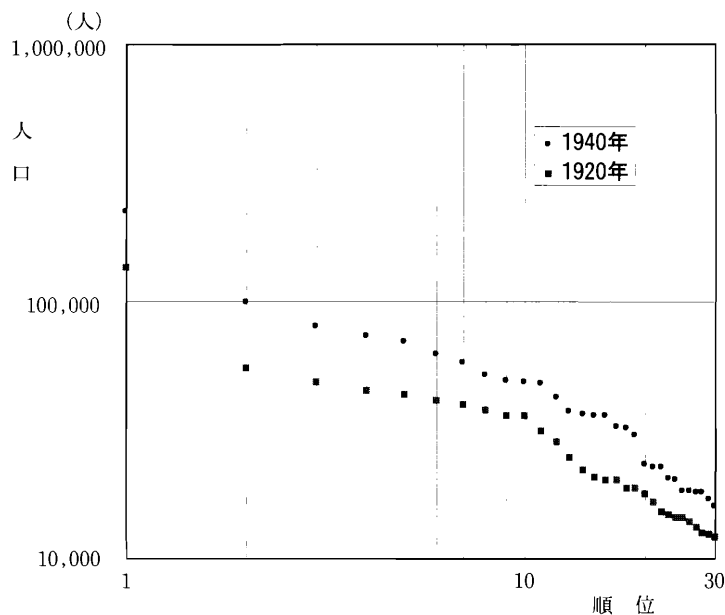


図1 都市の順位規模

資料：国勢調査報告

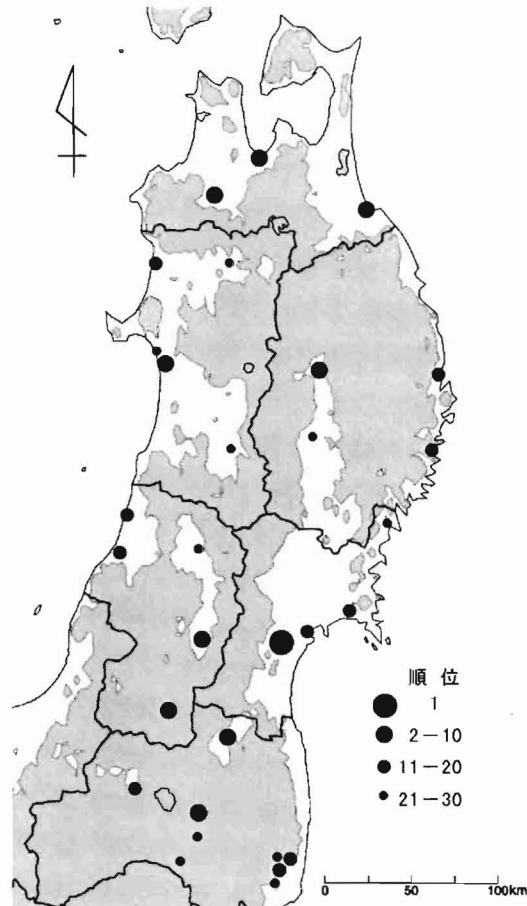


図2 順位30位以上の市町村（1940年）

資料：国勢調査報告

2. 都市機能と都市成長の関係

次に市郡別の産業別就業者の資料が得られる1940年について都市機能分類をおこない、これと都市成長との関係について吟味することにする。ここで取り上げるのは16の都市である。産業別就業者の中から、水産業、鉱業、工業、商業、交通業、公務自由業を取り上げた。水産業は第1次産業ではあるが、水産都市の存在を考慮して付け加えた。

都市の機能分類の方法であるが、都市の数が少ないので必ずしも適切な方法とはいえない部分もあるが、ここではNelson（1955）の方法を適用した。この結果を表1の右端に示した。これによると盛岡、能代、山形は特定の機能への特化をみせない総合的な都市といえる。青森は交通業、弘前は商業と公務自由業、八戸は水産業に特化し、釜石は工業（製鉄）と水産業、仙台は交通業と公務自由業、石巻は水産業、秋田は鉱業（石油）と公

務自由業、米沢は工業（繊維）、鶴岡と酒田は商業、福島は公務自由業、若松は商業、郡山は工業、平は鉱業（石炭）と商業に特化していることがわかる。

これらの都市機能が都市の成長と深く結びついているといえる。すなわち、仙台はその規模が大きく、また、交通業、公務自由業に特化していて最上位階層に属し、東北地方の中で国家的都市システムの中に組み入れられているという前述した結果を裏付けている。また、県庁都市の中では、秋田、福島が公務自由業への特化を示し、青森、盛岡、山形は特化は示さないものの高い値を示して、行政機能等が集中していることがわかる。県庁都市の中には青森が交通業、秋田が鉱業に特化しているように他の機能を付加している都市もある。

県庁都市以外で注目すべきものが、工業への特化を示す釜石、米沢、郡山の存在である。これら

表 1. 産業別就業者率と都市の機能分類 (1940年)

(人, %)

	就業者総数	水産業(F)	鉱業(Mi)	工業(Mf)	商業(R)	交通業(T)	公務自由業(O)	都市分類
弘前市	16,034	0.09	0.37	23.34	35.83	6.57	17.13	RO
青森市	31,837	3.46	0.42	19.79	28.60	14.46	13.56	2T
八戸市	31,029	22.46	0.04	18.53	18.47	5.23	6.49	2F
盛岡市	27,771	0.16	0.50	26.42	27.60	8.47	16.88	
釜石市	17,458	13.55	0.68	50.64	16.36	5.80	5.29	F2Mf
仙台市	71,918	0.09	0.52	26.04	27.88	11.70	20.12	TO
石巻市	13,738	16.89	0.12	24.20	26.13	4.55	8.73	F
秋田市	20,225	0.10	2.08	22.58	26.92	9.42	19.50	MiO
能代市	13,138	0.65	0.27	35.73	18.54	5.94	9.89	
山形市	24,403	0.01	0.24	33.57	28.09	7.12	15.81	
米沢市	19,419	0.02	0.15	49.06	22.79	5.17	9.80	Mf
鶴岡市	14,065	0.06	0.63	34.50	32.76	4.50	11.76	R
酒田市	11,541	0.42	0.25	31.91	33.23	7.94	10.59	R
福島市	17,916	0.00	0.36	30.31	32.00	9.58	18.89	O
若松市	16,679	0.10	0.28	39.49	33.20	6.34	11.46	R
郡山市	23,285	0.05	0.28	46.50	24.34	6.01	7.80	Mf
平市	11,814	0.08	3.26	26.85	33.31	8.44	10.66	2MiR
全国	32,230,745	1.67	1.85	25.16	15.09	4.22	6.78	
m+s		10.22	1.40	41.36	33.05	10.07	17.13	
m+2s		17.02	2.19	50.99	38.68	12.66	21.65	

資料: 国勢調査報告

表 2. 昭和55年の境域による人口

(人)

	1920年	1930年	1940年		1920年	1930年	1940年
青森市	101,086	130,059	147,955	湯沢市	27,928	30,914	33,110
弘前市	86,944	100,048	109,615	大曲市	27,654	31,843	33,294
八戸市	63,706	79,529	99,768	鹿角市	40,501	41,023	46,125
黒石市	25,531	29,877	33,024	山形市	116,797	139,688	144,567
五所川原市	26,167	29,802	34,000	米沢市	75,039	77,716	82,770
盛岡市	64,001	85,073	98,781	鶴岡市	68,758	75,691	77,220
宮古市	29,209	35,031	43,166	酒田市	63,109	71,538	72,146
水沢市	25,449	29,832	32,254	新庄市	26,003	30,192	31,730
花巻市	36,569	43,374	46,255	寒河江市	29,914	34,140	35,294
北上市	24,874	28,256	31,277	上山市	29,801	33,599	35,308
一関市	37,719	41,921	43,240	村山市	30,365	34,344	35,316
釜石市	33,392	44,310	62,136	長井市	26,821	31,387	32,209
江刺市	36,091	38,340	39,727	天童市	33,096	36,996	38,358
仙台市	169,227	228,112	258,878	東根市	25,056	28,623	30,254
石巻市	43,657	55,763	65,566	南陽市	31,872	38,754	39,110
塩竈市	14,704	24,931	37,651	福島市	121,613	141,859	152,095
古川市	35,092	40,697	43,969	会津若松市	63,699	73,814	77,186
気仙沼市	27,299	35,592	41,045	郡山市	109,004	136,501	152,843
白石市	31,285	34,051	34,796	いわき市	210,550	216,740	260,653
角田市	26,229	28,839	30,236	白河市	28,322	32,367	33,159
秋田市	104,141	122,973	134,896	原町市	25,040	29,443	30,776
能代市	39,360	45,935	50,144	須賀川市	34,187	39,775	41,244
横手市	32,250	36,610	38,658	喜多方市	28,493	33,070	34,339
大館市	43,433	47,465	51,636	相馬市	27,858	31,628	31,887
男鹿市	31,486	32,581	32,774				

資料: 国勢調査報告

の中で旧城下町の米沢は伝統的繊維工業であり、順位を下げているのに対して、釜石と郡山は近代工業であり、この2つの都市は1920年から1940年の間に順位を上げているのである。このように製造業に特化していても、その業種の差異が都市の成長の要因となっているのである。

以上のように、地域的都市システムの変化には、規模、都市機能、歴史的性格が関わっていることが確認できた。

Ⅲ 昭和55年の境域による都市人口の分析

1. 昭和55年の境域による1920～40年の人口規模

都市規模の変化を分析するとき、現代の境域に統一することによって変化を比較することが可能となる。そのため、総務庁統計局が昭和60年9月に発刊した「昭和55年10月1日の境域による国勢調査時の市区町村別人口（大正9年～昭和55年）」を基にして検討する。この理由は現代の観点からその行政域について都市規模の変化を分析することが、現代の都市システム形成の分析のために必要であると考えからである。現在、市となるべき要件としては特例として3万人とされている。表2には1940年時点で3万人以上のものを示したが、1920年または1930年に3万人以上でありなが

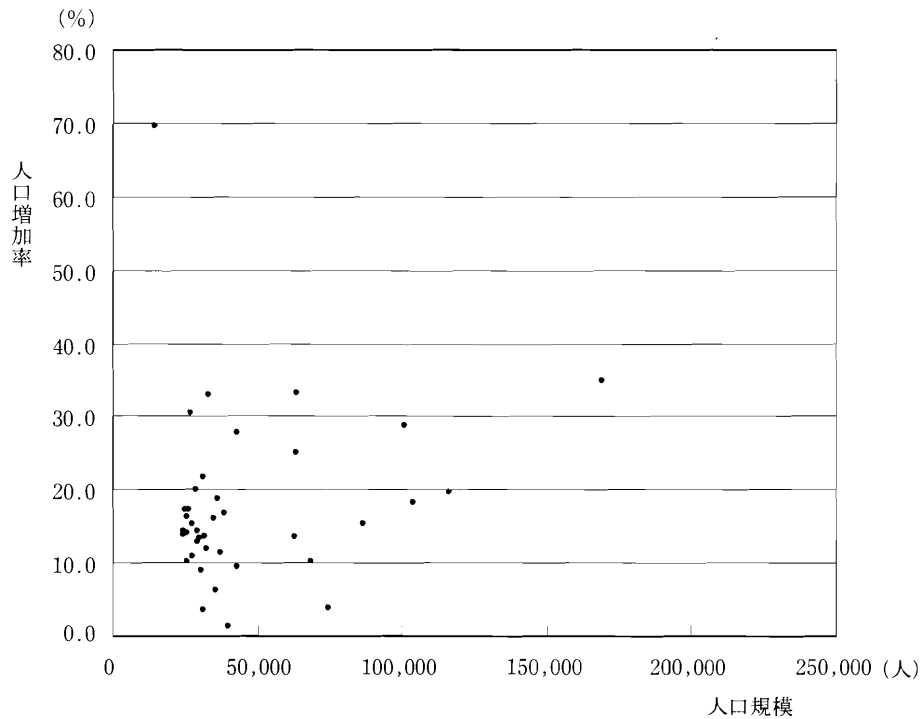


図3-1 人口規模（1920年）と人口増加率（1920-30年）の関係

資料：国勢調査報告

ら1940年には3万人未満となった市はない。

1920年で10位までを示せば、首位はいわき市(21.0万人)で、以下、仙台市(16.9万人)、福島市(12.2万人)、山形市(11.7万人)、郡山市(10.9万人)、秋田市(10.4万人)、青森市(10.1万人)、弘前市(8.7万人)、米沢市(7.5万人)、鶴岡市(6.9万人)となっている。なお、県庁都市の盛岡市は11位(6.4万人)となっていた。同様に1940年では首位がいわき市(26.1万人)、以下、仙台市(25.9万人)、郡山市(15.3万人)、福島市(15.2万人)、青森市(14.8万人)、山形市(14.5万人)、秋田市(13.5万人)、弘前市(11.0万人)、八戸市(10.0万人)、盛岡市(9.9万人)となっていた。1920年と1940年では仙台市が東北地方で2位で、いわき市が首位となっていたのである。次に県庁都市についてみると、福島県のいわき市、郡山市を例外として他の5県では県内で人口が最大を示している。

各時点で市制を施行していた都市数と昭和55年の境域について3万人を越えていた数を検討してみる。市数と人口3万人以上を年次順にあげると次のようになる。1920年は9、30、1930年は12、41、1940年は17、49となり、1920年から1940年の期間に人口3万人以上は着実に増加していることがわかる。

以上について規模別に検討するため、3.0～4.9

万人、5.0～9.9万人、10.0～14.9万人、15.0万人以上に分類してみる。以下、1920年、1930年、1940年についてみると、3.0～4.9万人が15、26、31、5.0～9.9万人が8、7、10、10.0～14.9万人が5、6、4、15.0万人以上が2、2、4となっている。これによれば、1920年から1940年の間に、小規模の都市が成長をとげていることがわかる。

2. 昭和55年の境域による人口増加

図3-1は1920年の人口規模と1920～1930年の人口増加との関係を、図3-2は同様に1930年の人口規模と1930～1940年の人口増加との関係を示したものである。ここでは1940年時点で人口3万人以上の都市を対象としている。

図3-1により人口増加率の高い順に5位までを示せば、塩竈市の69.6%、仙台市の34.8%、盛岡市の32.9%、釜石市の32.7%、気仙沼市の30.4%である。塩竈市は宮城県中央部の港湾都市で、1941年に市制を施行した。近世には港町、塩竈神社の門前町であり、港湾の修築(1882～85年)と東北本線の開通(1887年)により、近代的港湾へと発展した。1929年には、当時東洋一の広さをもつ魚市場が開設されて、全国有数の水揚げ港となった。気仙沼市も水産都市である。人口数で最大のいわき市では人口増加率が0に近い。

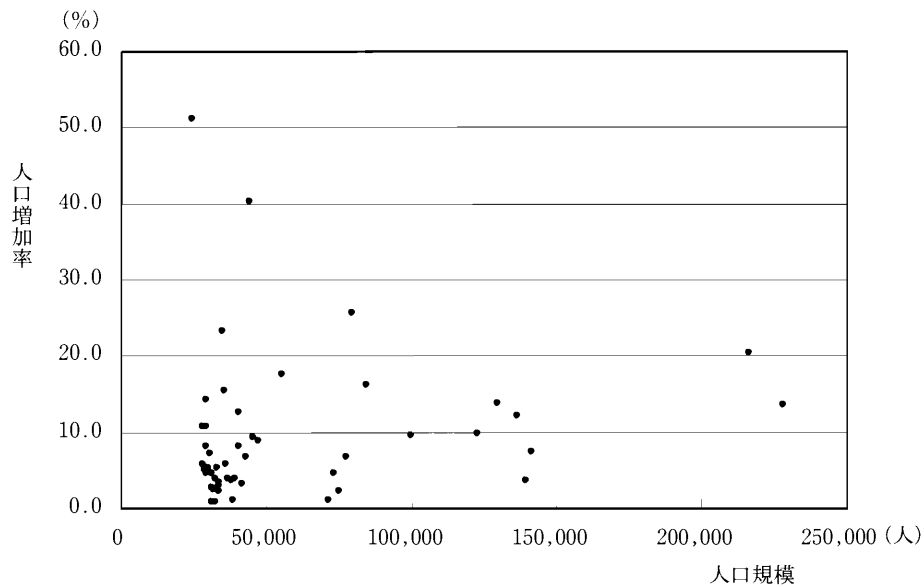


図3-2 人口規模（1930年）と人口増加率（1930-40年）の関係

資料：国勢調査報告

次に、図3-2をみると、全体的に増加率は低下しているが、人口増加率で5位までを示せば、塩竈市の51.0%、釜石市の40.2%、八戸市の25.4%、宮古市の23.2%、いわき市の20.3%となっている。八戸市は1929年に3町と1村が合併して市制を施行した。八戸藩の城下町でもあるが、大正末期の日の出セメント進出を期に工業化が進んだ。八戸港は1935年に重要港湾に指定されている。宮古市は1941年に、1町3村が合併して市制を施行した。江戸時代には盛岡藩の代官所が置かれ、海産物の

積み出し港であり、また、漁業基地でもある。

以上のことから、昭和55年の境域による人口増加を分析すると、港湾都市の成長が顕著であり人口規模の大きさだけではなく機能による要因も強いことが理解できる。

Ⅳ 昼夜間人口比による日常的都市システムの分析

対象期間の中間の年次にあたる1930年の国勢調査報告を利用して、昼夜間人口比を常住人口（資料中では調査人口）1万人以上の51市町村につい

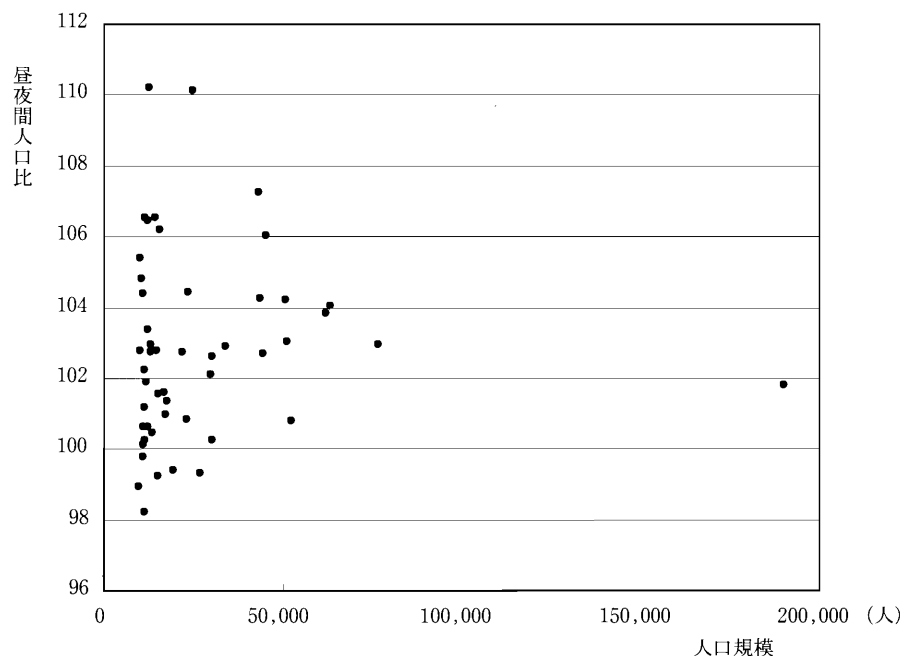


図4 人口規模と昼夜間人口比の関係（1930年）

資料：国勢調査報告

て計算した。昼夜間人口比は日常的都市システムを示していると考えられる。人口規模を1万人以上としたのは、日常的都市システムを分析する場合には、より小規模の市町村を含めるのが適切であると考えたからである。これをあらわしたのが図4である。

昼夜間人口比が最大値を示すのは古川町の110.2で、第2位は平町の110.1である。古川町は宮城県の大崎平野の商業中心であり、平町は旧城下町でともに地域での中心性の高さ示している。105から110を示すのは、弘前市107.2、中村町106.5、原町106.5、喜多方町106.4、大館町106.2、福島市106.0、一関町105.4の7市町であり、県庁都市の福島市を除くと地域の商業中心都市である。福島以外の県庁都市を取り上げれば、青森市102.9、盛岡市103.8、仙台市101.8、秋田市104.2、山形市104.0となっており、値は必ずしも高くはない。これらは行政域の中に就業者が多く居住していることも理由と考えられる。

また、上記で取り上げた以外についてみると、八戸100.8、米沢102.7、郡山103.0、若松104.2となっている。1940年で人口規模が12位となる釜石は100.2で八戸と同じく低い値を示しており、就業者が行政域内に居住するという工業都市の性格をみせている。

以上のように、昼夜間人口比という視点からする日常的都市システムにおいては、規模による要因も作用しているが、農村地域の中心都市での中心性が高く、地域的要因が強く作用しているといえる。

V まとめ

以上の結果についてまとめると次のようになる。

- 1) 1920年から1940年の都市の順位規模変化をみると、仙台は国家的都市システムに組み入れられていることと、近代工業都市と県庁都市の成長、旧城下町の衰退が認められる。
- 2) 昭和55年の境域によって人口増減をみると、1920年から1940年の間に小規模の都市が成長をとげていること、また、港湾都市の成長が

顕著であり機能による要因も強いことが理解できる。これらにより都市規模の差異が縮小し、戦前に都市システム形成の萌芽がみられたことを示す。

- 3) 昼夜間人口比から日常的都市システムをみると、成長をみせる県庁都市や工業都市では値は必ずしも高くはなく、農村地域の中心都市での中心性が高く、地域的要因が強く作用していることがわかった。

今後の課題としては、戦前の大都市圏と他の非大都市圏とについてさらに比較検討し、地域的都市システムの特性を明らかにすることがあげられよう。

参考文献

- Bourne, L.S. (1975): Urban System, Strategies for Regulation Oxford Press
- Nelson, H.J. (1955): A Service Classification of American Cities in the United States Economic Geography 31, 189-210
- 浮田・中村・高橋監修(1996): 日本地名大百科 小学館1327頁
- 金坂清則(1975): 新潟平野における都市の変容 — 明治から昭和初期 — 人文地理 27, 252-293
- 河野敬一(1987): 山形盆地における中心地構造の変容 — 明治期から昭和初期まで 地域調査報告 9, 117-126
- 後藤雄二(1987): 旧仙台藩領における明治前期の輻輳地 弘前大学教育学部紀要 58, 11-18
- 後藤雄二(1993): 青森県における人口変動と都市システムの関係 弘前大学教育学部紀要 69, 1-11
- 後藤雄二(2000): 昭和初期における青森県の都市 弘前大学教育学部紀要 84, 11-17
- 田辺健一編(1982): 日本の都市システム — 地理学的研究 — 古今書院484頁
- 寺谷亮司(1985): 北海道における市街地網の変遷 — 明治から現在まで — 東北地理 37, 239-255
- 森川 洋(1990): 広域市町村圏と地域的都市システムの関係 地理学評論 63A, 356-377
- 森川 洋(1985): 人口移動からみたわが国の都市システム 人文地理 37, 20-38
- 森川 洋(1990): わが国の地域的都市システム 人文地理 42, 97-117
- 森川 洋(1991): わが国における都市化の現状と都市システムの構造変化 地理学評論 64A, 525-548